

© Nightwatching B.V. 2007

■「レンブラントの夜警」  
■公開中  
■京都シネマ  
075-353-4723  
■監督/ピーター・グリーンナウェイ

## レンブラントの夜警

MOVIE

公開中

### 名画の裏に、きっとあったはずの、 巨匠のドロドロ×キラキラ劇場。

明治以前の日本と同じく、中世ヨーロッパで絵画は政治・権力と密接に結びついてきた。そんな中で、画家の中にはパトロンや画商の間を渡り歩き、権力の攻防の中をしたたかに泳ぐ、ちょっとヤバめな人物だって多かったはず。画家って聞いて、NHK「日曜美術館」みたいなお上品な世界を想像しちゃう人、それ、ごくごく最近の、しかも日本の話です。17世紀オランダの画家・レンブラントの「夜警」といえば、誰もが美術の教科書で見た

ことのある名作。だが、実はこの作品には奇妙な点がいくつもある。何故、夜警の中に子供の姿が？ 何故、男の持つ鉄砲はうっすら煙をあげている？ 不遜なグリーンナウェイの映像マジックで観客は中世オランダヘトリップ。画家・レンブラントが「夜警」の中に込めたメッセージの深層を解き明かす。名画の裏に語られぬドラマあり。見終わった後は、「夜警」がまったく違って見えること確実。(沢田眉香子)



© Laurent Philippe

## ピナ・バウシュ ヴッパダール 舞踊団「フルムーン」

STAGE

4.2  
(wed)

### 毎度、驚きのピナ・バウシュ公演。 今度は…なんと舞台に水が!?

一体何が起るのか、予想のつかないピナ・バウシュの舞台。ここ何度かの来日公演ではダンサーの絶叫やカップルの殴り合いなど、トラウマ級のキツイ演出は影をひそめ、ポジティブな空気が舞台にあふれていて…と書いて、よくまああんなキツイ舞台黙って観てたな、と感慨。ピナ・バウシュの舞台はダンスであってダンスでない、ダンスの根底にある感情や情熱そのものを舞台にあげることに実験だった。突

拍子もない動きや観客との交感(客いじりもあり)など、「これがダンス？」と毎回がショック療法だった。何度かの来日で、この「目から鱗」の体験を重ね、日本の観客もピナのメッセージ「踊りは…感情だ」を受け止められるようになった(と思う)。舞台一面にカーネーションを咲かせたり、砂で埋め尽くしたり、毎回楽しみな舞台装置に、今回は「水」が登場するらしい。びわ湖にびったりです。(沢田眉香子)

■「ピナ・バウシュ ヴッパダール舞踊団『フルムーン』」 ■2008.4.2. ■びわ湖ホール 077-523-7133  
■S席13000円 A席11000円 B席9000円 C席7000円 D席5000円 E席3000円

調子が悪いエンジンに長尺ドライバーの先を当て、柄の方を耳に当て「機械と会話」しながらエンジンの最速回転数を調整していた父親の姿をよく覚えていた。コンピュータの自己調整機能が働き、自ら元の回転数まで戻そうとする現代の自動車と同じ事をやると、かえって調整が効かない。自動車技術の進歩には目を見張るが、最新技術が導入されると電子化された特殊技術や高価な故障診断器がないと対応できないので、メカニックはその習熟に翻弄される。そんな背景から近年メカニックは「修理屋」から部品丸ごとの「交換屋」になった感がある。

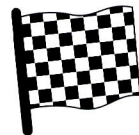


結果「知恵を絞る、安くていい仕事をやる職人魂」と、そこから生まれる「思いやり」が見えにくくなってきている(立場上、誇示するものではないのだが)。教習所では「ありがとうハザード」を教え

### 「クルマ社会に思いやりを」

## Kyoto Car-Moratorium

~京都人のクルマ知らず~



11th Lap to go



© QUATRE ILLUSTRATION

中島 崇 (なかじま たかし)  
68年生。自称「クルマのソムリエ」。創業昭和38年、北区は紫野の自動車屋「株」中島商会の二代目社長にして「安くていい車」を探すスペシャリスト。かつて自動車オークションの取引で2000万円をトクに捨て、大失敗の連続から学んだノウハウをまとめた無料小冊子「その車を出すなら」も好評。中島流「車道家」を旨とする京都人。